

〈協同のひろば〉

協同組合と福祉

—鹿児島地域協同組合研究集会から—

神田 嘉延 (鹿児島県/鹿児島大学教育学部)

鹿児島地域協同組合の第2回総会兼研究集会が協同組合デーの7月1日に開かれた。この日は朝から雨が激しく大雨警報がだされていた。研究集会も中止しなければならないと考えていたが、熱心な研究会参加者の要望のため強行した。鹿児島大学教育学部の会場は停電になり、一時はどうなるかと思ったが、予定どおりのプログラムを行った。当日の参加者は35名であった。

総会では、1年間の研究会の成果として、研究冊子「'95かごしまの協同」(B5版57頁)ができたことを確認し、1年間の活動を総括した。定例の研究会年8回と鹿児島大学公開講座「生活協同組合運動と地域づくり」などの活動内容を総括した。財政問題の困難さや賛助会員の拡大の工夫など多くの課題が残されているが、地道に研究会を続けていくことの必要が強調された。

研究会の活動スタイルも積極的に鹿児島県内で活躍している協同組合のトップ・リーダーや地域の協同活動をめざしている様々な団体・機関に直接出向いて意見を聞く会を開いたらどうかという斬新な提案などがだされた。

鹿児島の未来を地域の協同の時代を造っていくという理念で、楽しくなるような展望を出している地域協同組合研究会が求められていると思う。協同組合間相互の連携活動と地域社会の未来展望のため、様々な団体・機関との関係が必要である。そして、地方自治体との関係で協同組合のあり方を模索する段階ではないかと考える。

研究集会の記念講演の八幡正則氏(鹿児島総合研究所特別研究員)の「生活営農を提唱する」は、新たな視点をだした意欲的な地域づくりの提言である。講演の要旨は次に示す内容である。

「生活営農」は、自給農を基本にしながら、それに止まらず、母なる土地、環境を保全するとい

う農業の視点を提起する概念である。農業経済だけを考える功罪は大きい。組合員の暮らしをよくするというはどうか。金がなければ暮らしがよくなるという「手段の目的化」があった。

大規模化しなければすべてが解決できないものではない。営農団地構想は、一作主義である。連作障害がでる。生活営農は理屈ぬきで安全な食べ物、農家の人が自分の食べるものは安全という延長線で人さまに食べてもらうものも安全という協同と連帯の精神の必要からきている。

地域では、安定兼業農家の数が支配的であり、この農家の人達が絶対に農業をやめないということを経営効率の論理一本やりであった。米の収入よりも年金の方が農業の取り扱う収入が多くなっている。農村において年金所得が大きな比率を占めている現実を直視しなければならない。

いくらもうかる農業という話をしても多くの農家の人は健康や都会の子どものことに関心がいつている。もうける話をするのは、それぞれの作物別の生産者部会では意味があるが、多くの組合を対象とした話にはならない。

都会の子どもにも有機農業の作物、つけものを送ったら喜ばれたという話が大切にされる。父の血の経済の合理性よりも母の血の暮らしの論理が大切である。不合理なことがあっても人間の集まる場所に目をむけなければ、暮らしがなりたないことを理解すべきである。

戦後に農村を対象とする研究者は、部落を封建的と規定したが、もう一度集落を生活論から見直すことが必要である。

鹿児島でも兼業農家が安全な食べ物の考えから、ブランドをつくっている。仏教用語で共生(と

もいき)という言葉がある。すべてのものに仏教の心があるということだ。共に生きるという考えを大切にすべきではないか。

協同組合の活動の目的は、人間の幸福である。人間の幸福は、5つの条件がある。命、お金、自由、安全、安心である。自由、安心、安全は一人で行えるか。協同が必要である。

集落のなかでは、くわえタバコをする人はいない。しかし、自分の集落ではしないけれど外にいったらする人はみかける。このようなことはいろいろなことでいえる。なぜか。集落では自制心が働くのである。

コミュニティのもつ意味を現代社会のなかで見直すことが多いのではないか。集落をどのように保存していくか。農村の文化行事はどうなっているのか。地域の教育力はどうか。

金銭欲、利潤拡大のためと贅沢な消費欲拡大という欲望の拡大をみる。資本論を読んで、欲望の拡大というおぞましき資本主義的な人間になりたくないということが心に刻まれている。日本の企業の経営者で学生時代に資本論を読んだものは少なくない。

アレントがのべた労働、仕事、活動ということで、資本主義的な労働の優位ではなく、仕事ということが大切にされなければならないということが考えさせられた。農業という営みに単にもうけるということではなく、仕事ということから考え直す必要がある。

以上のように1時間半にわたって情熱に語りかけような講演内容であった。

次に実践報告が行われた。鹿児島協同組合と福祉というテーマで3人の報告があった。高齢者協同組合の鹿児島での展望では、労働者協同組合の方から報告があったが、自治体の協力の不可欠性がのべられた。鹿児島では、自治体ではどこでもよくわかりましたということで、現実の対応になるとなかなか回答がないということである。今後は高齢者や地域での相互援助が必要であり、高齢者協同組合の必要性は実感できるのであるが、いざ実践段階になると展望がない。高齢者協同組

合の島をつくりたいと思っている。与論島は若者が行くところとなっているが、高齢者にとっての与論島のパラダイスも造らねばならない。

鹿児島医療生協からは高齢者自身の相互扶助のボランティア組織わらび会の報告があった。このボランティアの実践は積み重ねが8年間ある。一人ぼっちの高齢者をなくすということで、お茶のみ会からはじまったものである。

そのうちお茶を飲んでいるだけでは楽しくないということで、世の中のためになる活動ということで、市長と語る会をする。高齢者に対する給食ができないものかということで、運動をしていく。全市対象で少ないが91年度から宅配ではないが、8000食を対象にしてのふれあい給食がでる。この成果は、医療生協をバックにしての活動の結果である。はじめて議会の内容をみる。行政に対する要求のしかたも覚えた。益々世の中が見えてきて自分たちが地域を変えていることがわかる。

また、地域では塩分測定、血圧測定などして健康管理の活動もしている。システム緊急電話として、一人暮らしのために色々配慮している。市役所に申請できなくて困っている人も多い。会として、高齢者にたいする権利があるものはきちんととりくむようにしている。活動しているといつまでも若くて人との触れ合いの大切さも理解できる。これが誠の生き甲斐である。65歳以上の元気のであるボランティア活動の報告であり、実に楽しくなるような話であった。

コープ暮らしの助け合いは、15周年の記念事業としてスタートした。他の生協にも見学して学ぶ。現在で9年になる。現在活動している高齢者の一人暮らしを助ける活動は15組である。今後の課題として、活動の内容が高齢者に限られている。元気な高齢者との活動の輪も必要である。高齢者が若者との交流をしたいと望む。地域の枠を拡大したい。活動会員を増やすなど多くの課題がある。

以上の実践報告について活発な議論があった。大雨のなかで参加者は少なかったが、大変に実りのあった集会であった。